

# 文化・文芸

✉bunka@asahi.com

月曜～金曜掲載

## 西欧に映った戦後の日本像

賀川豊彦

日本初のノーベル文学賞候補

今月発表されるノーベル文学賞で、1947年に日本人初の「候補」となった人物がいる。作家よりも社会活動家として知られる賀川豊彦(1888～1960)だ。なぜ賀川だったのか。



### 「救済の目的小説」と国内評価

ノーベル文学賞の資料は選考から50年後に公開される。スウェーデンのノーベル図書館に、47年の文学賞候補として賀川を推す文書が残っていた。

「彼は世界文学に自らの位置を有している」

推薦したのは当時のスウェーデン王立文学史・古美術アカデミーの会員。ウプ

サラ大のクヌート・ベルンハルト・ベストマン教授だった。推薦書に賀川の小説

5作と詩集1作を挙げ、内容に触れながら力説した。「四季の移ろう自然の

裏にある日本を暴いた。人

びとは現代の苦しい貧困や産業化の圧力に苦しんでいる。そういう人たちに寄り添い、救済する人間愛が彼の詩を特徴付けている」

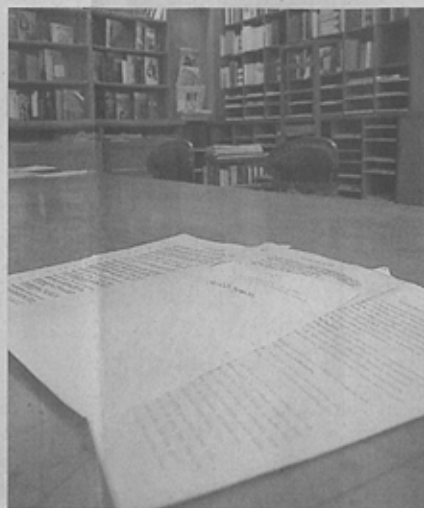
賀川は47年に35人の候補リストに残り、翌48年も31人のうちの1人に。ただ、

いずれも「文学性が低い」と最終候補から漏れた。

賀川は米プリンストン大で神学を学び、神戸で貧民救済運動に従事。生活協同

組合を日本に根付かせた。戦後復興や平和活動にも尽力した。作家としては、1

00万部のベストセラーになった20年の自伝的小説



公開された1947、48年のノーベル文学賞の選考資料。一番上が賀川豊彦の推薦文＝ストックホルムのノーベル図書館

「死線を越えて」がある。

ただ島崎藤村や菊池寛といった当時の文壇の重鎮は、

文学的には評価しなかった。賀川豊彦記念松沢資料

館の杉浦秀典副館長(50)は

「どの小説も、苦しい人たちが活動に目覚め、救われていくストーリー。救済活

動の普及をめざした『目的小説』だった」と話す。

「ノーベル賞の国際政治学」という論文もある高崎

経済大の吉武信彦教授(国際関係論)は「社会を改革

する人物による、同時代のドキュメンタリーのような

読み方をしたのかもしれない」と分析する。スウェ

ーデンでは30年代に社会活動家として注目され、10作

以上が次々と翻訳されてい

#### ■ノーベル文学賞の日本人候補者

候補者	候補の年
賀川豊彦	1947、48
谷崎潤一郎	58、60～64
西脇順三郎	60～64
川端康成	61～64
三島由紀夫	63～64

公開された1901～64年までの選考資料による

たからだ。

ノーベル文学賞の選考に

は、海外から見たその時々

の指摘もある。例えば68年

にノーベル文学賞を受賞した

川端康成は「美しい日本の私」を語り、羽織袴で授

賞式に出席した。戦後復興

を果たし、海外では富士山

や芸者といった日本像が広

まっていた。ストックホルム

大のグニラ・リンドベリ

ー・ワタ名譽教授(日本学)

は「本来はモダニストだった

川端も、海外の評価を意識して日本の伝統的な

美を打ち出した」とみる。

94年には「窮地にある現代

人を描いた」として、大江健三郎

さんが受賞した。「バブル崩壊

後は、西欧と同じ問題を抱えている

国と映っていた。共通するテーマ

を感じたのでしよう」賀川が推薦された47、48

年はどうか。「被爆のインパクト

が大きかった。日本と直接に戦っていない

西欧には同情があった。キリスト教的な救済活動をし、戦

後の問題を感じさせる作家として、賀川を推しやすかった

のではないか」そして現代。日本は優れた

ポップカルチャーの国というイメージが強い。「その

流れをとらえた文学が評価されるかもしれませ

ん」(ストックホルム＝高津祐典)